

【前置き】

以下の文章は、A~Fの連歌のやりとりによって話題が展開していきます。連歌は、和歌の上の句と下の句を交互に詠み合う文芸で、下の句から先に読むことも多く、以下の文章もそのようになっています。これを読んで、後の問い合わせに答えなさい。

【本文】

太政入道海海は、福原の岡の御所にて、中門の月を眺めておはしければ、その頃の捨て者登蓮法師、折節、うらなしを履きて、中門の前の月を眺めて通りければ、入道、

A 月の脚をもふみみつるかな

といひかけ給ひたりければ、とりもあへず、登蓮かしこまりて、

B 大空は手かくばかりはなけれども

とぞ申したりける。

そもそもこの登蓮を不便に A(して)、入道の御内に置かれける由来を尋ねれば、連歌ゆゑとぞ聞こえし。

先年、入道、熊野参詣のありけるに、頃は二月二十日余りのことなれば、遠山に霞たなびきて、越路に帰る雁金、雲居はるかにおとづれ、細谷川の水の色、藍よりもなほ緑にイ(して)、まばらなる板屋に苔むして、神さびたる里あり。なにとなく心すみけれは、入道、貞能を召して、「この所はいづくぞ」と尋ね給ひければ、「秋津の里」と申す。入道、とりもあへず、

C 秋津の里に X ぞ来にける

と詠じ給ひければ、嫡子重盛、次男宗盛、侍には越中前司盛俊、上総守など並び居て、付けむとしけれども、時刻はるかに押しうつりて、入道、「いかに、遅し遅し」と宣ひけれども、付け申す人なかりけり。ここに、熊野方より三十余と見えける修行

音の下向しけるが、「この道の習ひ、上下をきらはず候ふ」とa(申して)、

D 見渡せば切目の山に霞して

と付けたりければ、入遠感じ給ひて、「いづくの者ぞ」と尋ね給へば、「もとは筑紫安樂寺の者にて候ひしが、近年は近江の阿弥陀寺に住み侍り。登蓮と申す」といひければ、入道それより扶持して、所領あまた b(取らせて)、不便にし給ひけり。

とりわき大事の者にc(思はれける)ことは、去んぬる保元元年七月、宇治左大臣頼長公、世を乱り給ひし時、安芸守とて御方に勲功ありしかば、播磨守に移されて、かの国へ下向せらる。すなはち、当國の鎮守あにの宮、御神拝ありけるに、在厅人等供奉す。ここに神主申しけるは、「そもそも当社明神の感應新たにウ(して)、

(中略)

総じて国司を始めたてまつり、貴賤上下の諸人、参詣日夜に怠ることなし。ここに不思議のことあり。上古よりいまだ付け得ざる連歌の下の句あり。国司神拝の始めに、まづ御拝見あるは、先規なり」と申せば、入道、折節、登蓮をば具し給はず。我が身既に不覚しなむずと思はれければ、に

はかに大事の用を出だして、「国務におよばず、京都の重事あるよし開きて、早馬到来のことあり。①(この度は拝におよばず)、やがて下向し侍りぬれば、そのとき」とて、国府へ帰り、「さるにても、いかなる連歌にか」と尋ね給ひければ、ある社司の申しけるは、

E この神の名かあにの言とは

と申したりければ、いそぎこれを大事と思はれけるにや、上洛せられけり。やさしかりしことなり。

六波羅に着きて、いそぎ登蓮を召しておほせられけるは、「この度具足したてまつらず エ(して)、不覚におよべり」とて、件の連歌を語られければ、登蓮、うちなげきて、

F つくしなるうみの社にとはばやな

と申したり。重ねていそぎ下向し給へり。社参してかの社壇を開き拝見して、入道、件の句を付け給へり。神官、国の人々に至るまで感ぜずといふことなし。その言葉いまだ終はらざるに、御殿、三度振動して、すなはち巫女に付きて託し給へり。「神妙につかまつりたり。これ、あやしの者の句にあらず。我が国の風俗を思ふに、つれづれの余り、②(社会の諸人の心を慰め、我が憂さをも忘れやするとて、みづからいひ出だしたりし)。上古よりいまだ付けたる人なし。この喜びには官位は思ひのままなるべしよ」とて、上がり給ひぬ。

さればにや、同三年に大宰大弐になり、平治元年十二月二十七日、右衛門督信頼卿謀反の時、また御方にて賊徒を討ちたひらげ、同二年、正三位して、うちつづき宰相、衛府督、檢非違使別当、中納言になる上、丞相の位に至り、内大臣より左右を経ずして太政大臣の極位に昇る。これすなはち登蓮法師がゆゑとぞおぼえし。

【注釈】

- 太政入道淨海=平清盛のこと。仁安三年(一一六八)出家、法名を淨海と称した。以下、「入道」は清盛のこと。
- 福原の岡の御所=福原は、現在の神戸市兵庫区付近。岡の御所は、出家後の清盛が過ごした福原の高台の山荘で、天皇や上皇が臨席した時はその居所となることから御所という。
- 中門=表門を入って敷地の内側にある門。
- 捨て者=世捨て人。
- 登蓮法師=平安時代末期の歌人。
- うらなし=蘆草(いぐさ)などで編んだ草履(ぞうり)。
- 月の脚=地面などを照らしている月光。
- 手かぐ=いやだ、やめてほしいと思い、手を振って制止しようのこと。
- 熊野=現在の和歌山県にある熊野本宮大社・熊野速玉大社・熊野那智大社の三社の総称。

- 越路＝北陸地方。
- 貞能＝平貞能(さだよし)。清盛の側近。
- 秋津の里＝現在の和歌山県日高郡印南(いなみ)町の切目(きりめ)付近か。
- 重盛＝平重盛。清盛の息子。
- 宗盛＝平宗盛。清盛の息子。
- 盛俊＝平盛俊。清盛の側近。
- 上総守＝藤原忠清。平氏累代の家人。
- 切目の山＝現在の和歌山県日高郡印南町にある山。「切」に「霧」を掛ける。
- 筑紫安樂寺＝現在の福岡県太宰府市にあった寺院。
- 近江の阿弥陀寺＝現在の滋賀県近江八幡市にあった寺。
- 宇治左大臣頼長公＝藤原頼長のこと。保元の乱で挙兵したが敗れた。
- 安芸守＝安芸国(現在の広島県西部)の国司。
- 御方＝天皇方の軍勢。
- 播磨守＝播磨国(現在の兵庫県南部)の国司。
- 当国の鎮守あにの宮＝播磨国を守護する神社。
- 神拝(しんぱい)＝新任の国司が任命された国に下った際、その国の神社に詣でて拝礼する職務。
- 上下＝身分の高低のこと。
- この神＝「この神」と「兄(このかみ)」の掛詞。「あにの宮」の「あに(兄)」と縁語。
- つくしなるうみの社＝現在の福岡県糟屋郡宇美(うみ)町にある宇美八幡宮のこと。「うみ」(宇美)は「産み」との掛詞。
- 大宰大式(だざいのだいに)＝大宰府の次官。実質的には大宰府の最高責任者。
- 信頼卿＝藤原信頼。平治の乱を起こしたが、清盛に敗れた。
- 丞相(しょうじょう)＝大臣の中國風呼称。

(『延慶本平家物語』による)

【問題】

問一 AとBの句は一揃いの連歌ですが、AまたはBの句の説明として明らかにふさわしくないものを一つ選びなさい。

解答番号 [21]

- ① Aの句の「ふみみつる」は、「踏みみつる」と「文見つる」の掛詞である。
- ② Aの句は、中門に射し込む月光を踏まないように歩く登蓮を見て入道が詠んだ連歌の下の句である。
- ③ Bの句の「手かく」は、月光を踏まれた大空が手を振って制止する意と、文字を書く意を掛けている。
- ④ Bの句は、突然に入道からAの句を詠みかけられた登蓮がそれをつつしんで受けて詠んだ上の句である。

問二 二重傍線部ア～エの「して」のうち、文法的に明らかに異なるものを一つ選びなさい。

解答番号 [22]

- ① ア この登蓮を不便に(して)
- ② イ 藍よりもなほ緑に(して)
- ③ ウ 当社明神の感應新たに(して)
- ④ エ この度具足したてまつらず(して)

問三 空欄 [X] には四季を表す言葉が入ります。最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [23]

- ① 春
- ② 夏
- ③ 秋
- ④ 冬

問四 波線部 a「申して」、b「取らせて」、c「思はれける」の主語の組み合わせとして、最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [24]

- ① a 入道 b 入道 c 登蓮
- ② a 入道 b 登蓮 c 入道
- ③ a 登蓮 b 登蓮 c 入道
- ④ a 登蓮 b 入道 c 入道

問五 傍線部①「この度は拝におよばず」とありますが、その理由として最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [25]

- ① 入道が連歌の下の句を拝見しようとしたところ、播磨の国の政務よりも重要な事件を知らせる早馬が都から到着したから。
- ② 入道はすぐに連歌の下の句を拝見しようと思ったが、見るべきか否か一度都へ戻って登蓮の意見を聞いた方がよいと思い直したから。
- ③ 入道は今回の播磨下向に登蓮を連れてきておらず、連歌の下の句を拝見しても、上の句を詠むことができなかった場合は恥だと思ったから。
- ④ 連歌の下の句を拝見しても、詠むことができなかった場合を想定して、どんな下の句なのかを密かに社司から聞いておこうと思ったから。

問六 傍線部②「社参の諸人の心を慰め、我が憂さをも忘れやすとするて、みづからいひ出したりし」の解釈として、最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [26]

- ① Eの句は、あにの宮に参詣する人々の心をいたわり、参詣の人々の不満の気持ちをも忘れさせようと思って神自身が詠んだということ。
- ② Eの句は、あにの宮に参詣する人々の心をいたわり、また自らの不満の気持ちをも忘れるかと思って神自身が詠んだということ。
- ③ Fの句は、あにの宮に参詣する人々の心をいたわり、参詣の人々の不満の気持ちをも忘れさせようと思って入道が詠んだということ。
- ④ Fの句は、あにの宮に参詣する人々の心をいたわり、また神にも不満の気持ちをも忘れていただこうと思って入道が詠んだということ。

問七 この文章の内容に合致するものを一つ選びなさい。

解答番号 [27]

- ① 入道は、二月二十日過ぎに熊野参詣をしたところ、神さびた里があるのを見て、貞能にその名を問い合わせ、「秋津の里」と聞いて連歌の下の句を詠んだ。しかし、誰も上の句を詠めなかつたところ、今はその里に住む登蓮が上の句を詠んだ。
- ② 秋津の里で入道から素性を問われた登蓮は、もともとは筑紫の安楽寺に住み、つい最近までは近江の阿弥陀寺に住んでいたと述べた。諸国を流浪する生活を氣の毒に思った入道は、生活の面倒をみると登蓮に伝えた。
- ③ 播磨守となって播磨の国に下向した入道は、あにの宮に神拝のため参詣したところ、神主から上古より今まで誰も詠むことができていない連歌の下の句があるので見てほしいと言われた。
- ④ Fの句を詠んだ登蓮は、入道とともに播磨の国に下向し、あにの宮に参詣して社壇を開き、Fの句を奉ったところ、神官や國の人々が感嘆し、神までも喜んだ。

問八 平清盛と同時代に活躍した歌人として最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [28]

- ① 山上憶良
- ② 松永貞徳
- ③ 大伴家持
- ④ 藤原公任

【解説】

問一: 連歌の解釈

解答: ②

- 解説: 本文に「中門の前の月を眺めて通りければ」とあり、登蓮が月光を「踏まないよう歩いた」という記述はない。清盛の句(A)にある「ふみみつる」は、「踏み」と「文(手紙)」の掛詞だ。月光を文に見立てて「(地面に落ちた)月という手紙を踏んで見てしまったな」と冗談を言ったのに対し、登蓮が「空は(手紙を書くほど)狭くありませんが」と応じた風流なやり取り。

問二: 文法「して」の識別

解答: ①

この問題のポイントは、「して」が「サ変動詞(す)の連用形」か、それとも「接続助詞」かを見極める点にある。

- ① ア: 不便に(して)

「不便なり」は形容動詞だが、ここでは「不便に+す(サ変)」という形で

【不便にす】

► 不便にする=かわいがる、大切に扱う

という動詞的な熟語として機能している。

文脈も「登蓮を大切にして(大切に扱って)、屋敷に置かれた」という動作を表している。したがって、ここでの「して」はサ変動詞「す」の連用形だ。

- ② イ: 縁に(して)
- ③ ウ: 新たに(して)
- ④ エ: たてまつらず(して)

これらはいずれも、前の語を受けて状態や条件を補足する「接続助詞」

- イ・ウは「形容動詞(または断定の助動詞なり)の連用形 + して」の形で「～であって」という状態を表す。
- エは「打消の助動詞ずの連用形 + して」の形で「～しないで」という打消の接続を表す。

問三:空欄補充(季節)

解答:①

- 解説: 直前に「頃は二月二十日余りのことなれば」とある。旧暦の二月は「春」(一・二・三月が春)だ。旧暦と季節の対応は必須知識である。

問四:主語の判定

解答:④

- 解説:
- a:修行者(登蓮)が「この道の習ひ...」と申して。
- b:清盛が登蓮に所領を取らせて(与えて)。
- c:清盛によって登蓮が大事な者だと思はれる(思われた)。
- したがって、a=登蓮、b=入道(清盛)、c=入道(思う主体)となる。

問五:内容把握(清盛の心情)

解答:③

- 解説: 清盛は「我が身既に不覚しなむず(自分は失敗してしまうだろう)」と恐れ、急な用事を作って逃げている。これは、「登蓮を連れていない状況で、もし連歌が付けられなかつたら大恥をかく」と判断したからだ。私大入試では「貴族・武士のメンツ(恥)」が行動原理になることが多い。

問六:傍線部の解釈

解答:②

- 解説: 文脈から、この言葉は「巫女に付けて託し給へり(神が巫女に乗り移って告げた)」内容だ。つまり、神自身の言葉である。「我が憂さ(私=神の物思い)」を忘れるために、神が自ら下の句(E)を言い出したのだと説明している。

問七:内容合致

解答:③

- 解説:
- ①:登蓮はその里に住んでいたわけではなく、修行者として通りかかっただけ。

- ・②: 清盛が「気の毒に思った」のではなく、連歌の才能に感心して優遇した(不便にす=大切にする)。
- ・③: 本文後半の記述通り。播磨守として下向した際、神主から先例として連歌の件を告げられている。
- ・④: 登蓮は京都に留まっており、播磨へは清盛が一人で(あるいは登蓮抜きで)再下向している。

問八: 文学史(時代判定)

解答: ④

- ・解説: 清盛は平安末期の人物。
- ・①山上憶良(奈良・万葉集)
- ・②松永貞徳(江戸・俳諧)
- ・③大伴家持(奈良・万葉集編者)
- ・④藤原公任(平安中期・三十六歌仙の一人、『和漢朗詠集』編者)

【現代語訳】

太政入道淨海(平清盛)は、福原の岡の御所にて、中門に差し込む月を眺めていらっしゃったところ、その頃の世捨て人である登蓮法師が、ちょうどその時、粗末な草履を履いて、中門の前の月光を眺めて通り過ぎたので、入道は、

(A)「月が地面に落とした手紙(月光)を踏んで見てしまったことだなあ」

(※「踏み見」と「文見」を掛けている)

と(連歌の下の句を)言い掛けなさったところ、すぐさま、登蓮はかしこまって、

(B)「大空は(手紙を)書くほど狭くはございませんが」

(※「手かく(文字を書く)」と「手を振って制止する」を掛けている)

と申し上げた。

そもそも、この登蓮を(清盛が)大切にして、入道の屋敷に置いておかれた由来を尋ねると、連歌が縁であったと伝えられている。

数年前、入道が熊野参詣をなさったとき、時期は二月二十日過ぎのことであったので、遠くの山には霞がたなびき、北陸へと帰っていく雁の鳴き声が雲の彼方からはるかに聞こえ、細谷川の水の色は藍(藍染の濃い青)よりもいっそう緑に見えて、まばらな板葺きの屋根に苔が生えていて、神々しい里がある。なんとなく心が澄み渡ったので、入道が貞能を呼んで「この場所はどこか」とお尋ねになったところ、「秋津の里でございます」と申し上げる。入道はすぐさま、

(C)「(はるばる)秋津の里までやって来たのだなあ」

と(下の句を)詠じなさったところ、長男の重盛、次男の宗盛、侍には越中前司盛俊や上総守などが並んで座っていて、上の句を付けようとしたけれども、時間ははるかに過ぎ去って、入道が「どうした、遅い遅い」とおっしゃったが、付け申し上げる人がいなかつた。そこに、熊野のほうから三十歳ほどに見える修行者が山を下って来たが、「この道(連歌)の作法は、身分の上下を問いません」と申し上げて、

(D)「見渡せば切目の山に霞がかかっていて」

と付けたので、入道は感心なさって、「どこの者だ」とお尋ねになると、「もとは筑紫の安楽寺の者でございましたが、近年は近江の阿弥陀寺に住んでおります。登蓮と申します」と言ったので、入道はそれ以来彼を養い、領地をたくさん与えて、大切になさったのだった。

とりわけ(登蓮が清盛から)大事な者だと思われたことは、去る保元元年七月、宇治左大臣頼長公が世を乱しなさった時、(清盛は)安芸守として(天皇方の)御味方で手柄があったので、播磨守に移されて、その国へ下向なさった。さっそく、当国の鎮守である「あにの宮」へご参拝なさった際に、地元の役人たちが供奉した。ここで神主が申し上げたことには、「そもそも当社の明神のご靈験はあらたかであって、

(中略)

総じて国司をはじめとして、身分の高い者も低い者も、参詣を日夜怠ることはありません。ここに不思議なことがあります。遠い昔から、いまだに(上の句を)付けられずにいる連歌の下の句がございます。国司が初めて参拝なさる際に、まずこれをご覧いただくのが、先例でございます」と申し上げる。

入道は、その時あいにく登蓮を連れていらっしゃらなかつた。(もし答えられなければ)自分はきっと恥をかいてしまうだろうと思われたので、急に重大な用事を作り出して、「国務(の遂行)どころではない、京都で重大な事件があつたという知らせを聞いて、早馬が到着したのだ。①(今回は拝見するまでもない)、すぐに(都へ)帰ることにする、その時に(改めて拝見しよう)」と言って、国府(役所)へ帰り、「それにしても、どのような連歌なのか」とお尋ねになったところ、ある社主が申し上げたのは、

(E)「この神の名は、兄(あに)の言葉なのだろうか」

と申し上げたので、(清盛は)急ぎこれを重大なことと思われたのであろうか、京に上られた。優雅なことであった。

六波羅(清盛の邸宅)に着いて、急いで登蓮を呼んでおっしゃつたことは、「この度はお連れ申し上げずに、失敗しそうになつてしまつた」と言って、例の連歌のことをお話しになつたところ、登蓮は感嘆して、

(F)「筑紫にある宇美(うみ／産み)の社に尋ねてみたいものだなあ」

と申し上げた。(清盛は)再び急いで(播磨へ)下向なさつた。神社に参拝して例の社壇を開いて拝見し、入道は例の句(Fの句)を付けなさつた。神官や国の人々に至るまで、感心しない者はなかつた。その言葉が終わらないうちに、神殿が三度振動して、すぐに巫女に(神が)乗り移つてお告げになつた。

「見事に詠んだ。これはただ者の句ではない。我が国の風習を思い、退屈のあまり、②(参拝する諸人の心を慰め、自分=神の物思いをも忘れようと思って、自ら言い出したものであった)。遠い昔からいまだに付けた者はいなかつた。この喜びには、官位は思いのままであろうよ」と言って、(神は天へ)お帰りになつた。

そのおかげであろうか、(清盛は)同三年に大宰大式になり、平治元年十二月二十七日、右衛門督信頼卿が謀反(平治の乱)を起こした時、また御味方として賊徒を討ち平らげ、同二年、正三位になって、引き続き宰相、衛府督、檢非違使別当、中納言になるうえ、大臣の位に至り、内大臣から(左大臣・右大臣を)経ることなく太政大臣の最高位に昇つた。これはまさに、登蓮法師のおかげだと思われたのであった。

【練習問題①】

I. 重要古語の識別

- Q1. 古語「不便なり(ふびんなり)」が持つ、入試で最優先される意味2つは何か。
- Q2. 「とりもあへず」を現代語訳せよ。
- Q3. 形容詞「やさし」が持つ、現代語の「優しい」とは異なる重要な意味を一つ挙げよ。

II. 文法・識別の技術

- Q4. 「(打消のす) + して」の「して」の文法的な名称を答えよ。
- Q5. 「不便に(して)」の「して」の文法的な正体を答えよ。
- Q6. 助動詞「けり」が持つ、二つのシーンでの再頻出の意味を答えよ。

通常時は高確率で▶

和歌の中では高確率で▶

III. 読解・敬語・文化

- Q7. 謙譲語「申す」「聞こゆ」の、敬意の方向(誰から誰への敬意か)を答えよ。
- Q8. 文末に「せ給ふ」がある場合、主語はどのような立場の人物と推測できるか。
- Q9. 和歌や連歌で、一つの音に二つの意味を持たせる修辞技法を何というか。

【練習問題①の解説】

I. 重要古語の識別

A1. かわいそうだ／大切にしたい(愛おしい)

> 現代語の「不都合だ」の意味で出ることは稀。清盛が登蓮を「不便にす」れば、それは「大切に世話をすること」という意味になる。

A2. すぐさま／間髪入れずに

> 動作の即時性を表す。連歌のやり取りなど、機転が求められる場面で頻出する。

A3. 優雅だ／風流だ／感心だ(または「恥ずかしい」)

> 心理的な繊細さを表す語。単に「Kind」という意味ではないことに注意！

II. 文法・識別の技術

A4. 接続助詞

> 「～しないで」と訳す。直前が「す(連用形)」なら接続助詞だ。

A5. サ変動詞「す」の連用形

> 「不便に(形容動詞の連用形)」+「す」で「大切にする」という動作になる。

A6. 過去／詠嘆

> 基本は「過去」だが、和歌や会話文、あるいは「なりけり」の形では「～だなあ」という「詠嘆」になる。

III. 読解・敬語・文化

A7. 動作の主体(作者・話し手)から、動作の受け手(言われる人)への敬意。

> 「誰に」言っているかを確認することで、会話の相手(客体)を特定する武器になる。

A8. 天皇・上皇、あるいはそれと同等の最高権力者。

> 主語が省略されても、「せ給ふ」があれば即座にトップクラスの人物だと判断しよう。

A9. 掛詞(かけことば)

> 「ふみ(踏み／文)」などのパターンをいくつか覚えておくと、初見の歌でも意味が通るようになる。

【まとめ】

1. 頻出語句

現代語の知識で解くと間違える「古今異義語」は、短文解釈や内容一致問題の急所！

- 不便なり(ふびんなり)
- 意味:「かわいそうだ」、または「大切にしたい・愛おしい」。
- 入試のツボ:現代語の「不都合だ」の意味で出ることはほぼない。本文では清盛が登蓮を「大切に世話をする」という文脈で使われた。
- とりもあへず
- 意味:「すぐさま」、「間髪入れずに」。
- 入試のツボ:連歌や和歌のやり取りなど、機転の速さが問われる場面で頻出する。
- やさし
- 意味:「優雅だ・風流だ」、「感心だ」、または「身が細るほど恥ずかしい」。
- 入試のツボ:単なる「Kind(親切)」ではなく、洗練された振る舞いや、繊細な心理状態を指す。
- 申す・聞こゆ
- 意味:「申し上げる」(謙譲語)。
- 入試のツボ:謙譲語は「動作の受け手(言われる人)」を高める。誰に対して言っているかを確認すれば、登場人物の関係図が描ける。

2. 「して」の文法識別

文法問題で最も差がつくのが、同じ形の語の正体を見抜く「識別」！

- 接続助詞の「して」
- パターン1:「打消の助動詞『ず』の連用形 + して」

- 例:たてまつらず(して)
- 訳:～しないで。
- パターン2:「断定の助動詞『なり』の連用形 + して」
- 例:緑に(して)、新たに(して)
- 訳:～であって(状態を表す)。
- サ変動詞「す」の一部としての「して」
- パターン:「形容動詞の連用形 + して」
- 例:不便に(して)
- 訳:大切に(して)。
- 判別法:「～にする」という動詞として訳せるかを確認せよ。形容動詞の語幹とセットで動作(振る舞い)を表している場合は、接続助詞ではなくサ変動詞の一部だ。

3. 「和歌・連歌」の技法

掛詞(かけことば)

一つの音に二つの意味を込める技法。こないだ渡した掛詞集をおぼえてね。

- 例:「ふみ」=「踏み」と「文(手紙)」。
- 例:「うみ」=「海・宇美(地名)」と「産み」。

4. 敬語による主語判定

主語が書かれていない箇所は、敬語をヒントに特定する。

「せ給ふ・させ給ふ」(二重敬語)

- これがあれば、主語は「天皇・上皇・太政大臣(清盛)」級の人物に限定される。

「申す・聞こゆ」(謙譲語)

- 主語は身分が低い者(または自分)、相手は身分が高い者となる。